

No. 509【2022年6月17日配信】

学生時代から才能を発揮した根市良三 その2 (担当:村上真美)

こんにちは。歴史資料室の村上真美です。
メールマガジンのご愛読ありがとうございます♪

今回のお話は、以前あおもり歴史トリビアNo.505(令和4年5月20日配信)でご紹介した青森市出身の版画家・根市良三(1914-47)についての続編になります。

前回の配信では、昭和9年(1934)頃から日本版画協会展への出品を止め、文学に興味を持ち始める…というところでお話しが終わりました。

ですが、製作活動を止めたわけではありません。昭和10年は石版画に取り組み、昭和18年には第18回国画会展へ「時雨図」、「竹図」を出品し、入選するなど活動を続けていました。また、昭和19年には、銀座画廊にて創作版画個人展覧会(3月26日から30日までの5日間)を開催します。この開催のお知らせは同年3月25日付の『東奥日報』で紹介されました。製作活動は、昭和21年まで続いていきます。

彼と同級で親交のあった関野準一郎による『根市良三年譜』によると、昭和12年頃より詩歌や俳句、文学に興味を持ちますが、何を好んで読んでいたのでしょうか。良三が遺した『良記暦』(漢文体で書かれた日記)によれば、昭和13年に太宰治の『姥捨』を読み、昭和16年に『東京八景』、昭和20年に『正義と微笑』と『佳日』など太宰の作品を読んでいた。

昭和2年に青森中学校(現青森高校)に入学した良三ですが、太宰治は先輩でした。年譜を見ていくと、太宰のほかには鷹山宇一や阿部合成、柿崎卓治、菊谷栄蔵(菊谷栄)などが卒業生に名を連ねます。著名な方ばかりですね。偶然なのでしょうか…?



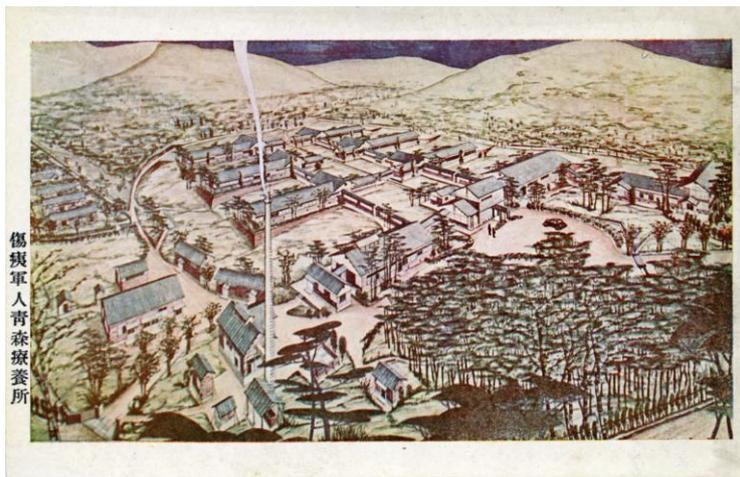
青森県立青森中学校(歴史資料室蔵)

関野準一郎が興味深いことを語っていました。「本土最北端の青森は本州でいちばんおくれて稲作農耕の普及した地域で、寒冷のため生産が低い上に明治資本主義からおきざりにされた土地で、政治や経済の面では発言力もなく…(中略)…そのため若い人たちは文学、美術、芸能、スポーツに熱を燃やし、場を求めるようになった。」(『版面を築いた人々 自伝的日本近代版画史』美術出版社 1976年)

青森という土地や環境が、少なからず影響を与えたのかもしれないね。

昭和15年良三が26歳の時に、断章詩歌集『雨の庭』を刊行します。

しかし、良三は体調を崩し、昭和21年5月に東津軽郡西平内村の国立青森療養所で療養生活を送りますが、翌年5月24日に32歳という若さでこの世を去りました。



西平内村の傷痍軍人青森療養所
(昭和20年に国立青森療養所と改称、
青森県所蔵県史編さん資料)

さらに調べていくと、美術や文学のほかに、中学時代からレコードを熱心に聴くなど音楽にも関心がありました。才能はもちろん、加えて幅広い教養を持っていた方だったんですね。

※今回の内容は、『青森県立郷土館調査研究年報 第29号』(青森県立郷土館 2005年)、『県政のあゆみ 第21巻 第10号』(青森県県民課 1972年)、山内祥史 編集『太宰治研究19』(和泉書院 2011年)などを参考にしています。